

# 現代国語の指導における大要主義の提案

溝 口 健 也

(一)

古典の授業には一つのスタイルがあるが、現代国語には固定したスタイルがない。それだけに面白味もあれば苦勞もある。各種の研究授業においてもそれぞれの工夫がこらされ、たいへん参考になるのだが、不幸にして、研究授業と平常の授業とは全く別物となる傾向は避け難い。何故なら研究授業では内容を徹底して掘り下げる事に努めるし、授業形式としては一方的な講義を避け、生徒に活動させる事を重視し、ディスカッション形式、グループ学習形式等とる場合も多い。その為進度は甚だ遅く、このペースでは教科書のごく一部しかできない事になるので、研究授業の方法をそのまま平常に持ち込むわけにはいかないからである。

その結果「受験準備の為に教科書を一応こなさなければならぬ。良心的な授業ができない」という嘆きが、どの場合でも出るので、通例の研究授業の授業だけが良い授業かどうか、些か疑問がある。又、欲するままに綿密な良心的授業を行えば、年間に扱え

る教材は甚だ僅かになるが、高校教育の役割から見ても、それが妥当かどうかにも問題がある。

私の学校でも教科書が残る事は珍しくない。特に三年では三学期が殆ど使えない事もあって、半分方残ることがむしろ普通である。機械的に後半を残したのでは、教材に偏りを生ずるので、あらかじめ単元ごとにピックアップして時間配分を予定する。一度やってみれば確かな事は分らぬという面もあるので、在来は、なるべく新しい教材に触れて勉強しようという趣旨で、毎年教科書を変更していたのを改め、同一教科書を少くとも二年は使う事とし、前年扱った者が一人はその学年の担当に残って、経験に基づく意見が出せるようにし、適正なピックアップができるように努力している。

このように一応の努力はしているが、ピックアップ方式で良いかどうか、私としては少なからず疑問に感ずる事も多く、共通試験を行なわぬ単独責任のコースでは、進度をあげる試みもしている次第である。まだその結果を云々する時期でもなく、又本来数学に表わ

されるような結果が出るとも限らぬ事と思つているが、一応現在の時点で言える事として、在来の授業方式に対する反省と、今後の方向についての一案をあげ、諸賢のご指導を得たいと思う。

(一)

現代国語において、十分に準備して綿密な時間をかけた授業を行なつても、心中に甚だむなししい思いを感ずる事がある。その理由は次のようなものであると考える。

その一は、生徒の発展段階に比して無理な要求をし、教師の道業になつていないかという事である。

一年の教科書にも観念論的発想の一文がある。現在の生徒には観念論は縁遠いので、そのような思考法に対する理解を深める努力が必要である。だがここで哲学概論をやつても大した効果は期待できない。むしろその一文の趣旨を正確に理解させる事だけに努めるのが良い。三年間の中には観念論的発想の文も何度か出て来るから、それらの文を通して或程度その種の思考法に馴れる事もできよう。その思考法を哲学的に分類し、命名し、歴史的に体系づけるのはそれからの問題であり、或は大学の教養課程に期待しても良い事であろう。理解の爲の素養を作るのを無視しての掘り下げは、教師の道業に過ぎないという所以である。

全体のバランスの問題もある。三年単元一の長与善郎の一文を正しく理解する爲には、観念哲学への理解も、白樺への文学史的知識も、当時初めて成立した富裕な市民階級への社会的理解も必要であるといえる。だがそれらについて時間をかけて論ずる事により、肝心の文の印象は何処かに消えてしまい、それらの事項についての雑然とした不確実な知識しか、残るものは無くなつてしまふ。バラ

ンスを失した掘り下げも、やはり教師の道業に過ぎぬ。

その二は、誤まつた深読みをしていなかという事である。

文の一字一句の含みを検討するのは、原則としては良い事である。だが、時としては、筆者自身言葉のリズムに乗つて書いていると思われ、必ずしもさしたる深い意味を有しな思われる語句についてまで、その語の指す内容を特定する事を求めたり、その隠された内容を穿鑿して、作者の進歩性や封建的後進性を立証して見ようとする。代名詞の扱い等、入試問題の中にも、誤つた深読みを要求した例もあつたようである。

その三は、こじつけをしていなかという事である。

古文の授業は訓詁註釈という基礎作業を主として成立する。国語教育は古典教育であり、古典教育としての型が成立していた処に、現代文重視主義で漸次現代文教材が多くなつたので、現代文を訓詁註釈するのにてこずつて、やや感傷的な文学鑑賞法に流れる傾向があつたが、私の教えられた時代の国語であり、戦後、平明な、非文学的な文を重視する時代となり、何とか配当の時間をその材料で消化し、かつテストの問題も作る爲に、早く言えば問題点をこじつける爲に四苦八苦したのが、私の教員生活の前半時代であつたように思う。現在はよほど進歩しているけれど、その名残りはまだ存在する。特に平明な日用文において、理想として示してある生徒に手紙を書かせたりという作業は、時間もかかり過ぎるし、客観テストの方法も困難だし、結局本文の趣旨とは何の關係もない口語文法の問題を掘り出して、時間をかけたりする。古文の授業とは品詞分解であるという時代があり、馬鹿馬鹿しくは思ひながらその修業をする間に、その型が身についてしまい、文意理解中心主義がなかなか

か現場に滲透しないように、今では当然と思つてやっている授業の中に、身につけてしまったこじつけ法が大分混つておりそうである。

授業やテストで見る限り、生徒の理解力は甚だ低い。しかしその生徒が自発的な読書活動では、案外な能力を示している例も少くないのである。一読すれば分る文を、さんざんつき廻してさっぱり分らなくするのが、専門職たる国語教師の特技であるという皮肉にも、襟を正すべきところはあるように思う。

私は綿密な分析的な授業の重要性は十分に認めている。だがその一方、私自身の受けた最も印象深い授業は必ずしも綿密なそれでは無かつた。印象深かつたものは、正岡子規が茶煎や野苺を食いながら山道田舎道を歩く、素朴な青春の楽しさであり、夏目漱石が峠の茶屋で婆さんのいれる茶を飲んでゐる世外の仙骨であり、つまりそういう味のある文を淡々として提出し、教師は黒衣の地位に甘んじて「文」自体の語るに任せた、地味で平凡な授業が結局最も印象的な良い授業であつたのだと思われる。現在の国語教科書が、日常性中心、ジャーナリスチックな片々たる文中心に偏つてゐるのは残念な事だが、現在の教科書の中にも、文自体に語らせた要素は無いわけではない。それが好い材料であれば、掻き廻して煮詰めて存分に技量を發揮する支那料理の料理人ではなく、包丁の金気を当てる事も慎んで材料の持味を生かそうとする日本料理の板前のようにありたいと思う。時間をかけた授業だけが好い授業であるわけではない。

望ましい時間が無くて実行できないとよくいわれるのは、ディスカッション的な授業法である。討議を重んじたグループ学習形式

は、生徒が興味を持つ、少くとも内職しないという利点がある。その反面、有合せの知識の持ち寄りにとどまり、新しい境地への飛躍力にも乏しく、時間のかかるわりに、体系的な知識を与える上で効果も上がらない欠点がある。どうもこの種の方式は、経験学習中心のデュイー方式のシッポに新しい衣裳を着せた感があり、教育の本筋ではないようだ。経験学習の本来アメリカでも、グループ学習の本来ソビエトでも、今は全く廃れて伝統的な講義式詰込式全盛になつているのも、興味深い現象である。

東京教育大の介沢教授は、情報化時代、即ち情報過剰時代における国語教育の在り方を次のように提唱しておられる。

情報過剰時代には、情報の要点を早く正確に掴む技術が必要である。極端に言えば斜め読みでも飛ばし読みでも要点は把握する能力が必要である。かかる能力を練磨する為の国語教育、いわば情報化時代に適応する国語教育が必要である。その反面、情報過剰、映像過剰の時代には、散漫になりがちな思考力、個性的な統一を養う為に、一つの教材をじっくり時間をかけて掘り下げる、いわば情報化時代に抵抗する国語教育も必要である。前者は所謂読書指導で、後者は教室における教科書の授業で行なうことが適当であらうといふのである。

これは原則的に適切な方向であると思われるが、教育現場の、教科書が残る、現行教科書にはごく平易な軽い文が多い、読書指導はなかなか軌道に乗り難い等の実情から見れば、先ず教科書の中を前者後者に分ける事が当面の必要のように考えられる。すなわち、

- (1) 若干の教材をモデルとして綿密に検討する対象とする。
- (2) 他の大部分の教材は進度を早くする。

## イ、速読により要点を掴む―日用文

ロ、論理を追って主題と構成を把握する―評論文

ハ、主題の把握と同時に文の持つ情調を感じとる―文芸作品  
(2)の中でも右イロハのどれに当るか考えておく。(1)(2)ともよみや語句の意味の理解を要求するのは勿論であり、純粹に必要な情報だけを得るための速読訓練の対象として教科書教材を扱うことは、量的にもできない。

右(1)(2)の配分と指導が適切であれば、現行の教科書をこなして、更に余裕を作る事も十分に可能であろう。余裕の時間には、現在時間がない為に自宅学習に廻している文学史もやりたい、漢文ももう少しやりたい等多くの要求が待っているのだが、筋道としてはやはり読書指導に向けるべきだろう。適当な教材を文庫本位で生徒に持たせ義務読書として課し、その上に立って若干の時間を討論等にあるというような方法でも、将来考えていくべきであろう。欧米の教育事情の視察談として、ハイスクールの国語の教科書が厚く、更に副教材を課して相当の量をこなさせる例が報告されていたが、参考になる事だと思ふ。

以上が私の「私の現代国語の指導における大要主義の提案」の大要である。これは、時間のかかる一原因であるディスカッション主義に重きをおかない事と、段階やバランスを考えない綿密さに疑問を持つ事から、自然に出て来る方向であって、ことごとしい理論に基づいた議論ではない。むしろ私はその事にそれなりの意味があると思つてゐるのである。

なお指導以上の配慮により、教科書をピックアップでなく全部こなすことは、それに伴う別の利点も存在する。生徒の中には教科書

以外に余り一般的読書をしない者も現実存在するし、読書するにしても或一方に深く入るのであって、それ以外の方面については、国語教科書で接した範囲が生涯の概念を決定している場合も少なくない。してみれば、個性の無い盛合せ料理であっても、各種各様のものが一応広く提示されている処に、実質上義務教育に近い国民教育としての、高校教育における国語の意味もそれなりに存在する。教科書でしか芥川を読まない沢山の青年がいるのだから、僅かにピックアップされて教科書にあがった数人の作家の中から、島木健作を深くやる為に芥川も藤村も捨てるという決心は、実にしにくい筈なのである。

盛合せ的である為に、現代語の範囲が、古今東西の文学・思想・言語・科学、上は天文より下はボウフラ・ゴキブリの生活に至る迄、やたらに広いという現象を生ずる。その各分野においてその蘊奥を極めてこれを伝授しようなどは、もともと及ばぬ望みであり、国民の常識としてあるべき程度の、知識や感覚や思考法について一通りを要領よく紹介し、更に深くどの方向にでも進める基礎を作つてやる、紹介者としての機能を中心とする。英語の教師が英語の手ほどきという技術を中心とする専門職であるとはほぼ同様に、国語の教師は前記の機能を持つ技術者としての専門職であり、主としてその機能において社会的責任をもつものであると考へている。従つて、荒野に叫ぶ預言者としての教師の使命を中心として発想される、極端な教科書ピックアップ論とは別の次元での考へを進めている次第である。

私は国語教師の本来の使命は、日本の言葉と、日本の言葉によって表わされた日本の文化に対する、理解と愛情とを育てる事であるべ

きだと思ふ。その為には、日本語の可能性を示した、一つの典型となり得る、名文の重視が必要であるが、文部省の指導は一貫して反対の方向を向いているのは甚だ残念であり、これを改めさせる要求は大いにしなければならぬと思うが、現行の教科書であっても、一部だけ綿密にやつて他を切り捨てるよりも、進度の緩急を適切に配分しつつ全部をこなし、更に読書指導にもあて得る時間を生み出すほうが、現代国語の指導法としては、まだまだであると考へてゐるのである。

(二)

大要主義による授業の一例を次にあげる。教科書は角川の「現代国語改訂版」の三、対象は三年普通科の四クラスである。

教授資料による時間配当例は次のとおり。  
教材名の下の算用数字が配当時間である。

近代の思想 一八頁

永遠への思慕

長与 善郎

3

社会科学と人間

大河内一男

3

近代の詩 一六頁

ためいき

佐藤 春夫

2

そぞろあるき

ランボー 荷風訳

1

せつなき思ひぞ知る

室生 犀星

1

マリアへ少女の祈禱

リルケ 茅野訳

1

郵便局

萩原朔太郎

1

世界の文学 三八頁

戦争と平和

トルストイ 米川訳

5

野うさぎ

コールドウエル 杉木訳

3

文体と表現 二四頁

現代の文体

中島 健蔵

3

参考 さまざまの文体

文章の構成

芳賀 綴

3

発表と講演 一六頁

演説について

ヒルティ

秋山訳

3

参考 ジュリアス・シーザー

科学技術と人間

茅 誠司

3

参考 評価表

近代の小説 四六頁

たけくらべ

樋口 一葉

3

冬の蠅

梶井基次郎

3

夜明け前

島崎 藤村

4

文芸論 二八頁

なぜ文学は人生に必要なか

桑原 武夫

3

社会と文化 三二頁

芸術の意味

リード

滝口 訳

3

ラスコー洞窟

竹山 道雄

3

小林如泥

石川 淳

3

言語の機能 三〇頁

言語の機能

時枝 誠記

2

ことばの正確不正確

熊沢 龍

2

参考 ことばの使い方

ことばとマスコミニケーション

永野 賢

2

伝統と創造 三〇頁

日本文化の雑種性

私の人生観

加藤 周一

小林 秀雄

4 4

この例は毎週二時間年間六八時間と見ているが、三学期を計算に  
れず、他にも模試・体育大会等の行事を考えれば、年間五〇時間と  
見てよい。そこで時間配当は原則として例示予定表の $\frac{2}{3}$ (四六時間  
)とし、単元一の一「永遠への思慕」と、単元二「近代の詩」を例  
示時間どおり(原則+3)、自由時間を1、単元八「世界の文学」  
を原則マイナス1+2として、これをやりくり用の余裕とする。

「永遠への思慕」に時間を取るの、生徒に比較的馴染の薄い観  
念的な文である事に注意したものであり、「近代の詩」に時間を取  
るのは、さりげない表現の裏にある厳しく計算された構成を、こ  
で分析してみたいからであり、私の好みでもある。自由時間一時間  
は、所謂「より教師の心臓に近いもの」を述べる時間である。人  
一倍自己の主観吐露に走りがちな自己の性情を自戒し、平常の授業は  
厳格に紹介者としての機能に徹するかわりに、年間に一時間だけま  
とめて脱線する機会を自分に認めようというのである。「世界の文  
学」では、コールドウエルの「野うさぎ」をごく軽くすませて良い  
と判断した。いずれにせよ、この案では、綿密な分析の方がやや手  
薄に失するが、三学期の期待できない三年としては、少し急ぎ足に  
なるのは止むを得ない。なお今年には編成上の都合で、国語の単位を  
二年と三年で入替えた部分もあり、実時間には多少相違があるが、  
実験の意味で一部の教材については、右の原則どおり週二時間で計  
画した配当表どおりの時間で、やってみる事とした。

論理的な文の例として単元一の一「社会科学と人間」を扱う。例  
示三時間、原則二時間であるが、念の為、一時間ですませるクラス

一、二時間のクラス一、自由時間一時間をここに関係して用い、合  
計三時間のクラス二とする。

この課は、社会科学を勉強するということは、時代の現象の底  
に、どういう「人間」が存在し、どういう歴史的な使命をになつて  
活躍していたかを突き止めることにある、という事を、アダム・ス  
ミスの国富論を例として、約四八〇〇字ばかりで、きわめて要領よ  
く述べたものであり、末尾の「学習」は次の四カ条である。

- (1) 本論の運び方をたどり、言おうとするところを明らかにする。
- (2) 「国富論」の人間観の特徴
- (3) 紅茶、コーヒー、ジンによって象徴される当時のイギリスの階  
層区分
- (4) 前課「永遠の思慕」と考え方を比較

これについて教授資料には次の如き学習指導の例が示されてい  
る。

### 第一時

教材名、作者名も板書し、社会科学とはどのような分野の学問を  
さすか生徒各自の考えを発表させ、概要をまとめる。

各自の社会科学に対する興味や関心の度合を問う。

### 指名読み

第一次読後感―感想・疑問点―などの発表

宿題―産業革命と、近代市民社会が形成される過程の概略を調べさ  
せる。

### 第二時

宿題の発表

疑問点の整理・解明

語句・文脈などの不分明なものを明確にする

各節・段落ごとの内容をまとめる―宿題

### 第三時

宿題の発表・点検

国富論の趣旨をまとめる。「学習」二

全文の構成を明らかにする。「学習」一

まとめ。「社会科学と人間」という題名について考える。

各自が今まで読んだ古典を、その時代の「人間」をつかむという観点から再考してみる（レポート）。

次に私の実践例をあげる。

(四)

次に私の実践例をあげる。

### 第一時

指名読み、適宜分量によって切る。読み誤りはその都度訂正。若干の語句について意味を明らかにする。

形式上の第一段落を意味上二段に、形式上の第三段落を意味上三段に分ける。適当にヒントを与えて余り時間をかけずに分けさせる。一―六段の主題を明らかにする。

### 第一段

社会科学を勉強するということは、時代の現象の底に、どのような「人間」が存在し、どういう役割をになって歴史の舞台で活躍していたかを突き止めることにある。

### 第二段

国富論の中で描いている「人間」は、「経済人」であり、利己的な本能を持った近代社会の「人間」である。そういう「人間」の利己的な本能を尊重することが、経済というものが宿命になっている近代社会が伸びるための人間的な要因である。

### 第三段

「人間」とは単なる個人的な人間ではなく、国富論の場合は第三階級という、階級的人間である。あわせて「学習」二。

### 第四段

第三階級とは、新興の商工階級と自由職業の従事者である。

### 第五段

当時のイギリスにおいて、階級差は生活習慣万般を規正する厳然たるものであった。あわせて「学習」三。

### 第六段

どういう「人間」が代表的な新しい人間として描き出されているかに注意し、そういう「人間」を理解することなしには、過去の社会科学の古典的な著作の持っている意義はわからないことを知る。右の如き答えを引き出す為に一応次の事を質問する。

### 第一段

社会科学の勉強の中心目的は何か。

### 第二段

国富論の中に躍動しているのはどういう人間か。

### 第三段

「」つぎの人間は唯の人間とどう違うか。

### 第四段

第三階級の具体的内容は？

### 第五段

紅茶、コーヒー、ジンの話の意味は？

### 第六段

まとめとして何処に注意するか。

右の間に関連し、第一段では「そういう」「そして」等に注意する事等、適宜に示唆し誘導補足して、余り時間をかけずに望ましい答えに至る。

各段の小主題を連ね、全文の要旨と全文の主題を明らかにする。

―「学習」一。

中世の禁欲と近世の欲望肯定、古典経済学の基本理念等について一言ずつ触れておく。

前課「永遠への思慕」の精神主義、この課の現実主義について簡単に触れる。前課は「現世の名利」の外の世界、この課は「現世の名利」の中なる世界である事に注意する。

ここまでが第一時の作業である。生徒の力をはかって誘導尋問をし、手間取ればこちらで答えを示していくようにして、極力テキパキと進めて行く。

一時間のクラスはここ迄で終わる。文意理解という目標は一応達していると考ええる。

## 第二時

補足説明したい点を文学史関係以外はほぼ完全な講義式で進める。

近世における欲望肯定について西鶴を想起させる。文学史は自宅学習としている為、わりに知識に乏しいので、西鶴の主要作品をあげ簡単な説明をする。

近世の欲望肯定への変化を社会構造の変化から説明する。中世の農本主義、キリスト教の利子の否定、シャイロックの意味、近世の

商工業中心社会等。例がイギリスである事について、特にフランスに比較、フランスと革命産業革命等。イギリスの階級制と日本の比較、類似性もあるが相違性が案外大きい、日本の歴史的な階級間の流動性等。

第三階級とブルジョワ階級を区別する。「特権の座にのぼらない前」という部分に注意させる。

国富論が第三階級の歴史的役割を認識した点で古典であると同様、資本論も労働者、下層農民階級の歴史的役割を認識した点で、優れた古典であることに注意。

教授資料中に指導上注意すべき事項としてあげてある四八項から、ことばのニュアンス等表現技術に関したもののみ数項とりあげて説明。

「学習」四をもう少し詳しくみる。

各項目について話す内容をよく整理しておかねばならぬが、それだけに或程度充実した話ができるように思う。

以上二時間で通常の意味ではこの課の授業は一応終了したと思うが、時節柄生徒に関心の深いマルクス等も出て来るので、二つのクラスで自由時間一時間をここに取る事とした。

## 第三時

初めに「いわば脱線であって私個人の意見であるが」と前置きして次のような事を話した。

古典経済学の「神の見えざる手」への信頼が薄れた処から、近代



経済学が成立する。基本はやはり自由経済主義である。

マルクス経済学は国家理性による統制経済主義である。ただし労働価値説や、資本主義の発展とともに労働者は益々窮乏化するという命題は、事実として誤りであった。

アメリカとソビエトの動きを見ると、巨視的には両体制は収斂段階に入ったと見られる。

革命は後進国が急速に工業化し「離陸」しようとする段階で実現しており、日本は古典的革命的妥当する段階とは考えられぬ。

資本主義から修正資本主義への変質、更に修正社会主義への収斂段階における、議会民主主義の持つ役割を評価、性急な議会民主主義否定論に反対。

傷だらけの「リベラリズムの現実」と、空中に描かれた「マルキシズムの理想」とを対比せず、現実と現実を対比することが必要である。その為にはもっと本を読んで視野を広げる事がだいじであり、正しい知識を欠いた「純粋な情熱」は時として有害である事を知らねばならぬ。

なお「国富論」の人間の利己的欲望の肯定を基本とする理念は、真に修飾のない人間社会の現実的認識で、経済の基礎理念として強い妥当性を持っているが、精神的価値として如何であろうか。倫理中心の社会の建設に、もう少し人間が本気にならねばならぬ時期が来ているのではあるまいか。

脱線であるから内職してもよろしい、という事で話したが、誰も内職をせずに真面目に聞いてくれた。それぞれが是非語りたい事を年間一時間に絞って語るならば、そう無責任な話にはならないのではないかと思う。但し、教育基本法は憲法を基盤としているも

のであり、憲法の基本精神に反する主張を教壇で述べる事は、時間の長短にかかわらず避けるべきであろう。又、脱線とはいいながら単元に對して間接的な関係でも確保しておくことも必要である。

(五)

右は理論的な文における「大要指導」のただ一例であり、しかもあまりいい例ではない。綿密な分析的な研究授業に注がれるエネルギーのごく一部が、各種のスタイルの教材における能率的な指導法の研究に注がれるならば、その効果は非常に大きいではなからうか。

能率的な指導法の一つの方向として視聴覚教材の利用ということがあり、最近の研修会では、国語教育における視聴覚教材の利用について、意欲的な発表を聞く事が多い。しかし私は、国語教育とは本来文字言語を中心とした言葉の教育であるという、牢乎として抜き難い偏見を持っており、映像時代であるからこそ、国語教育は頑固に文字の教育としての性格を守らねばならぬと考えている。最近、アメリカの学者グループの研究報告として、映像を通して入ったものは思索を喚起せず、体系的な記憶にも適さないで、結局、文字による教育が最も能率的であると結論された例がある事を知り、我が意を得たように思っている。

眼を見張るような新しい方法にはそれなりの副作用もある。おそらく講義を聴いて適切に進度の緩急を考えていくという、一見地味で平凡な方法の中で、目標の把握の仕方、緩急の度合等細かく検討していく以外に良い方法はないのではないか、という感じも一方には持ちながら、所与の条件の中でばつと努力していこうというところである。指導法の変更に当然テスト法の再検討にもつながら

る。前記「社会科学と人間」については、一時間のクラスも三時間のクラスも、中間試験の結果は全く差が無かったが、これは問題の出し方にもよるし、他のコースとの比較も不正確でまだ資料として使えるような結果ではない。今後は評価法との関係についても、よほど考えていかねばならぬと思っている。

(鎌ヶ谷高校)

※執筆当時は宇部高校